

組織学会通信

No.92

2022. 12. 20

【大会関係】

【1】2023年度組織学会年次大会報告

2023年度組織学会年次大会は、伊藤誠悟先生を実行委員長とし、武蔵大学主催で2022年10月30日（土）、2日（日）に開催されました。2019年に西南学院大学で実施された年次大会以来の対面による開催となったわけですが、330名（招待者含む）もの参加者を迎え、盛況のうちに終了することができました。武蔵大学の実行委員会の先生方におかれましては、対面での通常開催になるのかオンライン開催になるのかということを含めて、いつも以上に慎重かつ周到にご準備をいただくことになりました。にもかかわらず、思考を凝らした盛りだくさんのコンテンツをご用意いただきましたこと、心より御礼申し上げます。また当日ご来場くださり、ご登壇された先生方にも、重ねて御礼を申し上げます。関係者の皆様のご協力のおかげで、大きなトラブルもなく、無事に大会を終了することができました。

さて本大会は、「対話としての経営学」という統一テーマのもと、2日間にわたり、(1) 研究分野の専門家による対話形式のセッション、(2) 組織科学編集委員会セッション、(3) ランチョン・ミーティングおよび大会委員会セッション、(4) 基調講演、(5) 特別セッションなど、バラエティー豊かなセッションが提供されました。

(1) については、リーダーシップ、マーケティング/消費者行動、イノベーション、歴史、組織行動、アントレプレナーシップ、コーポレートガバナンスなど実に様々なテーマが設定され、狭義の経営学者はもちろん、マーケティング領域、心理学領域の研究者が実践家など、組織学会員以外を含めたバラエティーに富んだプレゼンターをお迎えすることができました。(2) の「組織科学への論文投稿の活性化に向けて」と題する編集委員会セッションは、投稿状況についての定量的/定性的な実証的な分析をベースとした、実に組織研究を行う学会らしいセッションとなりました。フロアからも活発な質問やコメントが寄せられ、学会誌の活性化に向けた大きな弾みとなる80分であったように思います。

更に、1日目の昼休みには、「学術書籍出版への道」というテーマでの(3) ランチョンセッションが開催されました。博士学位論文をベースに学術書籍を出版され、見事、組織学会高宮賞を受賞された兒玉公一郎先生（日本大学）、岩尾俊兵先生（慶應義塾大学）、さ

らにはお二人の書籍出版を支えた株式会社白桃書房大矢社長、そして株式会社有斐閣のお二人の編集担当をお迎えし、名著誕生の背景事情について、ヴィヴィッドにお話をいただきました。それに続く（3）大会委員会セッションでは、これから学術書籍の出版を考える若手/中堅研究者が、学術出版担当者の前で自身の書籍のアイデアをプレゼンするという、「学術書籍出版を考える研究者のためのピッチ・セッション」が行われました。このセッションを契機に、兒玉先生や岩尾先生のご著書のような優れた学術書が誕生することを、心から願う次第です。

（4）の基調講演では、世界的なヒット漫画『キャプテン翼』の初代担当者であり、作者の高橋陽一先生と二人三脚で歩んでこられた鈴木晴彦氏をお迎えし、『週刊少年ジャンプ』はなぜヒット作品を生み出し続けられるのか「今後の漫画界はどうなっていくのか」というテーマでご講演をいただきました。1981年に連載をスタートした漫画が40年以上経った今でも、なぜ世界中で愛され続け、決して色あせない「旬な」コンテンツであり続けているのか、といった点をめぐり、フロアとの活発なやりとりが行われました。

大会の最後を飾ったのは、（5）「経営学の工具箱」と題する特別セッションでした。学会員の間で大きな話題となった『組織科学』第54巻4号特集号「経営学の工具箱I」、第55巻1号「経営学の工具箱II」特集号の執筆者が集結し、組織科学誌上では書ききれなかった「道具の長所と短所」、「上手い使い方」、「まずい使い方」について解説、フロアとのやりとりを通じて、経営学研究に有用な様々な道具の組み合わせにより、どのように新しい研究を切り開くか、ということについて議論を深めることができました。

充実したセッションの実現にご協力くださった全ての皆様に心より御礼申し上げます。また繰り返しになりますが、伊藤誠悟先生、古瀬公博先生、森永雄太先生をはじめ、武蔵大学の先生方のご尽力によって、2023年度組織学会年次大会は盛況のうちに幕を閉じることができました。改めて、御礼を申し上げます。

ドクトラル・コンソーシアムの開催報告

さて9月30日（金）には、年次大会に先立ちまして、ドクトラル・コンソーシアム（ドクコン）が開催されました。オーガナイザーの稲水伸行先生、生稲史彦先生、宮尾学先生の御尽力に深く御礼申し上げます。周知の通り、ドクトラル・コンソーシアムは、年次大会に先立つ研究発表大会の大学院生セッションにおいて優れた発表を行った大学院生の会員が、大会委員会の厳正な審査によって参加資格を得るものになりますが、今回の大会より、ドクコン参加者について「組織学会2022年度研究発表大会（大学院生セッション）優秀報告者」という呼称を用いることにいたしました。優秀報告者におかれましては、研究の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。9月30日（金）には、ドクトラル・コンソ

ーシアム参加者に若干のゲストを加えて懇親会も開催され、相互の親睦を深めることもできました。

大会委員会の活動報告

次に大会委員会の活動について御報告いたします。まずトランザクションズの改革についてご報告申し上げます。

トランザクションズは、速報性と国際発信を重んじるオンラインのオープンアクセスジャーナルを目指し、国際的な学術誌要覧の掲載基準に適合させるために、昨年より改定作業を進めてまいりました。改定の主なポイントは、①名称変更、②投稿規程の改定、③査読プロセスの見直し、です。まず名称を「AAOS Transactions」に変更し、2022年8月よりJ-STAGEに搭載いたしました。次に、国際的な学術誌要覧の掲載基準に適合するよう、JST（国立研究開発法人 科学技術振興機構）によるジャーナルコンサルティングを受けながら、投稿規程の改定作業を行っております。それに合わせ、査読プロセスや査読基準等についても見直しを行なっているところです。

トランザクションズの改革につきましては、内容が確定いたしましたから改めて会員の皆様にはご連絡させていただきましますので、どうぞよろしくお願いたします。

また次回の2023年度組織学会研究発表大会から、組織科学編集委員会と大会委員会の共同により、「大会 CFP」（Call for Paper）という企画を立ち上げることになりました。詳細について改めて会員の皆様に説明をさせていただきますが、これは、研究発表大会での発表（大学院生セッションおよび研究発表セッションを共に含む）を基に、『組織科学』誌への投稿を奨励する企画になります。全ての報告者がCFPへの投稿の権利を有することになりますが、あわせて、大会発表時に「優秀である」と評価された会員については、『組織科学』編集委員会と大会委員会より、CFPへの「推薦」をさせていただく予定であります。あくまで「推薦」であり、原著としての採択を確約するものではありませんが、これを受けた報告者の論文については、原著以外での採択可能性も含めて編集委員会がコミットしていくこととなります。なお、このCFPへの投稿は、あくまで任意となります。仮に「推薦」を受けたとしても、本人が望まない場合には、『組織科学』への投稿が強制されることはございませんのでご安心下さい。以上を踏まえて、是非積極的に、研究発表大会へのエントリーをしていただければと思います。

*2023年度組織学会研究発表大会（京都産業大学）のお知らせ

2023年度組織学会研究発表大会は、6月24日（土）・25日（日）に、京都産業大学にて開催されます。次回の大会も、現時点では対面での開催を予定しておりますので、今から皆様のご予定を確保していただければと思います。いうまでもなく、研究発表大会の主

役はご報告される皆様になるわけですが、この大会では、「イノベーションの時代、日本企業の方向性は大丈夫なのか？：異なる領域からのアプローチと研究者の課題」と題し、藤本隆宏先生(早稲田大学)および加登豊先生(同志社大学)による特別講演を予定しております。いうまでもなく、両先生ともに、当該分野の大家でおられます。この講演とディスカッションを契機に、研究者や実務家といった多様なオーディエンスとの活発な議論が展開されること間違いありません。ぜひ、ご期待ください。

しばらくしますと大会報告の申し込みが開始いたしますが、大会報告申込を予定されている方は、執筆要綱を熟読の上、規定のフォーマットに則り原稿を作成し、チェックリストにて確認のうえ、ご応募くださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

大会委員会担当理事 井上 達彦

2023 年度組織学会年次大会 開催校挨拶

2023 年度組織学会年次大会は、2022 年 10 月 1 日(土)と 2 日(日)に武蔵大学を開催校として、3 年ぶりに対面にて開催いたしました。今回は、対面ならではの醍醐味を期待して対面開催に踏み切ったものの、新型コロナウイルス感染症の感染状況が日々変動する中で事前に旅程が立てづらいことなどから、ご参加が難しい方もでるのではないかという不安を抱えておりました。しかし結果的には、330 名という大変多くの方に参加いただくことができました。

担当理事の井上達彦先生をはじめとする大会委員会の先生方、編集委員会セッション、ランチョンセッションにご登壇いただいた先生方、学会事務局の樋口様には、心より御礼申し上げます。

今大会は、学会員の方々に専門分野以外の領域との接点を提供することを目的に「対話としての経営学」というテーマを設定して開催いたしました。リーダーシップ、ウェルビーイング、マーケティング、イノベーションなど合計 14 の領域で対話形式の議論が行われました。今回、学会員だけに留まらず、非学会員の実務家や異なる専門領域の研究者にもご登壇いただいたことで、通常の大会にも増して、一層多彩な視点からの議論が展開されたように思います。セッションにご参加いただいた先生方からは、これだけのメンバーが揃っているのだから 80 分では時間が足りなかった、もっと議論したかった、といったお声をたくさんいただきました。実際にセッション終了後に会場や空きスペースなどに残り、セッション参加者同士が議論する姿がいつまでも見られました。このような光景を目の当たりにすることで、対面開催の学会ならではの良さも、やはりありそうだと改めて確信いたしました。

これ以外のセッションとして、ドクトラル・コンソーシアム、編集委員会セッション、大会委員会セッションとその連動企画であるランチョンセッションが行われました。まずドクトラル・コンソーシアムでは、稲水伸行先生をはじめとする経験豊かな3名の先生によって博士後期課程の5名の学生に対する濃密かつ貴重なセッションを開催していただきました。次に、編集委員会セッションでは、『組織科学』編集長の立本博文先生と西村孝史先生によって「論文投稿の活性化に向けて」と題したセッションが開催されました。最後に大会委員会セッションでは、大会委員会の服部泰宏先生によって「学術書籍出版への道」と題したセッションが開催され、兒玉公一郎先生と岩尾俊兵先生に貴重な話題提供をいただきました。加えてランチョンセッションに続く午後のセッションでは連動企画として「学術書籍出版を考える研究者のためのピッチ・セッション」が開催されました。13名の応募者ご自身の出版企画についてピッチを行い、出版社の皆様をはじめとする参加者との対話がなされました。組織学会における新しい取り組みにご参加いただいた学会員および出版社の皆様にご改めてお礼申し上げます。

基調講演は、本学の所在する練馬が「ジャパニケーション発祥の地」ということもあり、アニメに関連する方にスピーカーにご登壇いただきました。『キャプテン翼』の版權ビジネスから見る日本の漫画アニメの更なる可能性」と題し、『キャプテン翼』のライセンス管理会社の株式会社TSUBASA 代表取締役 岩本義弘氏と『キャプテン翼』の初代編集者の株式会社MISAKI 代表取締役 鈴木晴彦氏に『キャプテン翼』の誕生秘話や、日本の漫画・アニメの可能性について対話形式で語っていただきました。

今回は対面開催を実現することができたものの、感染症対策の一貫で懇親会を行うことは残念ながら叶いませんでした。また大会期間中も教室での飲食は原則禁止など、コロナ禍以前の学会と比べると少々物足り部分をお感じになった方もおられるかと存じます。また慣れない学会運営故、皆様へのご連絡が遅くなるなどご迷惑をおかけした場面もあったかと思えます。ただ全体的には大きなトラブル無く盛況のうちに大会を終えることができましたと考えております。

2023年度組織学会年次大会が盛會に終わりましたことをここに報告し、開催にご協力いただきました全ての皆様、登壇者の皆様、参加者の皆様に重ねて、御礼申し上げます。ありがとうございました。

2023年度組織学会年次大会 実行委員長 伊藤 誠悟

2023年度ドクトラル・コンソーシアム報告

ドクトラル・コンソーシアムは、次世代を担う若手研究者育成を目指して2001年度より行われてきたものです。今年度は年次大会に先立ち、9月30日(金)に開催されました。この2年はコロナ禍の影響もありオンライン方式(Zoom)で開催してきましたのですが、今年

度は年次大会主催校の武蔵大学様に教室を用意していただき、久しぶりに対面式にて開催することができました。参加メンバーと内容は以下の通りです。

	氏名	所属
オーガナイザー	稲水 伸行 生稲 史彦 宮尾 学	東京大学大学院 経済学研究科 准教授 中央大学大学院 戦略経営研究科 教授 神戸大学大学院 経営学研究科 准教授
参加者	宇都宮 沙織 于 雷 小方 真 橘 樹 山口 久瑠実	早稲田大学大学院 商学研究科 博士後期課程 一橋大学大学院 経営管理研究科 博士後期課程 埼玉大学大学院 人文社会科学研究科 博士後期課程 一橋大学大学院 経営管理研究科 博士後期課程 北海道大学大学院 経済学院 博士後期課程

例年通り、午前・昼・午後の3つのセッションに分けて実施しました。参加者・オーガナイザーともに、朝から夕方まですべてのセッションに参加しました。

午前中は、オーガナイザーの生稲が主に担当し、新規取締役の交代可能性に関する研究（橘さん）と外部連携によるイノベーション創出力に関する研究（宇都宮さん）についてペーパー・ディベロップメント・セッションを行いました。午後は、オーガナイザーの稲水と宮尾が主に担当し、中国における政治的つながりと IPO に関する研究（于さん）と非倫理的行動と組織コミットメントに関する研究（山口さん）、日本企業の事例を用いた Burgelman モデルの理論的研究（小方さん）についてペーパー・ディベロップメント・セッションを行いました。また昼のセッションでは、昨年同様、稲水、生稲、宮尾のオーガナイザー3名が、若手研究者として取り組んで欲しいことをテーマに設定して15分程度のレクチャーを行い、意見交換をしました。

当日は、午前10時より全員で簡単な自己紹介を行った後、ペーパー・ディベロップメント・セッションを、10時20分から12時10分までと、14時から17時5分までの2回に分け、大学院生5名の論文について、1人50分の時間をとって報告・討議を行いました。各セッションでは、大学院生が自らの論文の内容を15分程度で報告した後に、事前に割り当てられた他の大学院生1名が5分間、当該論文の優れた点や改善の余地がある点について報告しました。その後、事前に割り当てられた担当オーガナイザーが8分間コメントをし、残りの時間で全員参加のディスカッションを行いました。

以上のペーパー・ディベロップメント・セッションの主目的は、「現在の原稿を学術誌（『組織科学』）への投稿論文に相応しいレベルにまで高めるにはどうしたらよいか」に置かれました。良い論文を書くためには、自分の研究と向き合うだけではなく、他の研究論文を批判的に読み解き、自らの研究に活かす必要があります。そこで、大学院生に自らの論文の

発表だけではなく、他の大学院生の論文に対するコメントも求めました。結果として、大学院生の皆さんは、オーガナイザーや他の大学院生からの質問・コメントを聞き、討議に参加することで、良い論文とはなにかをあらためて考えられたと思います。加えて、他の大学院生の論文に対するコメンテーターの役を経験したことで査読者の視点を体験し、論文執筆者以外の視点から自分の論文や研究を捉える経験を積むことができたと思います。

大学院生は皆さん優秀で、またテーマやトピック、方法論も多様でしたので、さまざまな角度から議論をすることができ、有意義な時間が過ごせたと思います。また、今回の参加大学院生には、学部から進学した日本人の大学院生に加え、社会人大学院生や海外出身大学院生など含まれ、様々なバックグラウンドの方が集まりました。そのため、将来の日本の経営学を担う若手研究者のダイバーシティの促進に寄与できたように思います。

午前終了後の昼のランチョン・ミーティングでは稲水、生稲、宮尾の3名のオーガナイザーが、これまでの研究活動を振り返り、どのように研究を進めていけばよいのか、どのような点に注意して投稿論文を執筆していくと良いのか、若手の時にどのようなことを心掛けて欲しいのかといったことを話しました。大学院生の皆さんが今まさに苦労し、悩んでいることに、オーガナイザー自身もかつて苦労し、悩んだ経験があります。だからこそ、それらの問題をどのように考え、いかに対処していったのかに関し、具体的な体験に基づいて話しました。そのため、大学院生のみならず、私たちオーガナイザー教員にとっても、深い学びを得ることができたと思います。また、オーガナイザーがかつて大学院生として学会に育ててもらえたお礼を、次の世代に送るという思いを強くしました。

また、コンソーシアムに引き続き、今年度は対面での懇親会を武蔵大学すぐ近くのスペイン料理のお店で開催することができました。同日17時30分開始でその他委員会と重なってしまったこともあり、オーガナイザー以外のゲストをお呼びすることはできませんでしたが、かえってコンソーシアムでの熱い雰囲気をそのままに論文の内容から研究生活まで話をすることができました。

今回のドクトラル・コンソーシアムは久々の対面開催となり、実施までには紆余曲折もありました。しかし、結果としては、例年になく盛り上がった非常に有意義な機会となったと思います。裏方としてさまざまなご調整を下さった組織学会大会委員の先生方、ならびに執行部の諸先生方と開催校の諸先生方、懇親会にご参加いただいた諸先生方、前々年度総合・管理担当オーガナイザーであった近能善範先生、その他関係者の皆様方に、心より御礼を申し上げます。

ドクトラル・コンソーシアムに招待されることは大学院生にとって名誉なことであり、またこの会で得られた同世代の若手研究者とのネットワークは貴重な財産となります。われわれ経営学研究者の多くは、大学の垣根を越えて、この組織学会と、日本の組織学界に育てられたという思いを持つ人が多くいます。われわれは、この会を通じて築かれた若手

研究者のみなさんの友情がその後、今後の研究生活において続くことを願っています。そして、ドクトラル・コンソーシアムでの議論を活かし、一人でも多くの大学院生の皆さんが『組織科学』に論文を掲載でき、将来の学会を牽引して下さることを心から願っております。

2023年度担当オーガナイザー 稲水伸行、生稲史彦、宮尾学

【2】2023年度組織学会研究発表大会のお知らせと公募要領

2023年度組織学会研究発表大会は、2022年6月24日（土）・25日（日）の両日、京都産業大学を開催校として対面にて開催されます。

2020年から始まったコロナ禍は社会を翻弄し、ここ数年はオンライン開催が続いておりましたところ、2023年は、研究発表大会としては2019年駒澤大学以来の対面での開催の運びとなりました。

研究発表大会は、自由論題による研究発表の場であり、ご報告される会員の皆様が主役となります。つまり、皆様のご報告の応募あってこそこの大会でありますゆえ、皆様の積極的なご報告をお願い申し上げます。

さらに、「イノベーションの時代、日本企業の方向性は大丈夫なのか？—異なる領域からのアプローチと研究者の課題—」と題し、藤本隆宏先生（経営学/ものづくり経営）および加登豊先生（会計学/管理会計）による特別講演を予定しております。ご両名とも、言うまでもなく当該分野の大家であります。含蓄のあるお話が伺えると同時に、領域の異なる先生方によるディスカッションを通して、研究者や実務家といった多様なオーディエンスに対して示唆のあるイノベーティブな議論が展開されるご講演になるかと存じます。

開催校一同、会員の皆様のご参加を心よりお待ちしております。

1. スケジュール

2023年1月20日（金）～3月31日（金）	演題登録・報告完成原稿受付期間
2023年1月20日（金）～5月20日（金）	事前参加申込受付期間
2023年4月中旬	大会報告審査結果通知
2023年5月上旬	大会プログラムの公開

2. 演題登録と報告完成原稿の提出

組織学会 Web サイトからリンクをたどっていただき、2023年度組織学会研究発表大会専用ウェブサイト(Confit)にログイン(要会員番号。組織学会から郵送される封筒の宛名ラベル右下に会員番号の記載がありますので、ご参照ください)し、演題、キーワードを登録

してください。キーワードは、セッション編成時の基準となりますため、以下の中からご自身の研究にあてはまるものを選んでください。

【方法論】 定量分析、定性分析、歴史研究、理論研究、文献レビュー（1つ選択）

【分野】 ミクロ組織、マクロ組織、人的資源管理、経営戦略、国際経営、マーケティング、技術・生産管理、イノベーション、企業家、経済学、法学、行政学、社会学、心理学、工学（2つまで選択）

事前参加登録および演題登録をした上で、Confit の原稿提出画面より報告完成原稿を提出してください。締切日(3月31日)以降、登録情報(タイトル名、報告者名、複数で発表する場合は名前の順番、等)の変更は一切認められません。変更の場合、報告をご辞退いただくことになります。

※なお、報告応募をされる場合には、事前参加申込を行わないと先に進めませんので、ご注意ください。

報告完成原稿は、『AAOS Transactions』掲載希望の有無に関わらず、執筆要綱に基づき、指定のテンプレートを用いて作成された原稿を受け付けます。提出前にはチェックリストを参照し、要件をすべて満たしているかをご確認ください。これまでの大会でも、テンプレート不使用、ページ数超過、行数字数やフォントサイズの変更、キーワード不在などがみられました。執筆要綱に則っていない原稿は、リジェクトされることがあります。

なお、『AAOS Transactions』に登載された論文は、公表論文として取り扱われます。他の学会報告や論文集の掲載等の二重投稿には十分ご注意ください。『AAOS Transactions』への掲載を希望する場合は大会報告後に改めて確認をいたしますので、ご回答ください。

3. セッションの種類とそれぞれの申込資格

演題登録時に、次のどちらかを選択していただくことになります。

(1) **研究発表セッション**：組織学会正会員(会費滞納者は不可)による自由論題の研究報告で、セッションは発表と質疑応答を含め 25 分となります。

(2) **大学院生セッション**：組織学会正会員(会費滞納者は不可)の大学院生(報告時に正規の大学院生として在籍していること)による自由論題の単独での研究報告です。セッションは報告 15 分、質疑応答 10 分、総計 25 分です。報告者の中から、大会委員会で選ばれた方を秋の年次大会時に開催するドクトラル・コンソーシアムにご招待申し上げます。

4. 採否の決定

複数の査読者が完成原稿を査読し、採否を決定し、2023 年 4 月中旬までに、筆頭報告者(ファースト・オーサー)に審査結果を電子メールにて通知します。

特に、参考文献リスト(References)の完全性は掲載の必須要件となっておりますので、投稿者の責任において細心の注意を払ってご作成ください。

2023 年度組織学会研究発表大会 実行委員会

【3】ドクトラル・コンソーシアムについて

6月の研究発表大会の大学院生セッションで報告した方の中から、大会委員会を選んだ大学院生を、その年の秋の年次大会時に開催する「ドクトラル・コンソーシアム」(ドクコン)にご招待いたします。大会委員会の選考基準は「組織科学に投稿して採択されるような論文になることが期待される報告」です。大会委員会で選ばれた方には、研究発表大会終了直後に「インビテーション・レター」をお送りいたします。ドクトラル・コンソーシアムはその年の年次大会前日にほぼ丸一日かけて開催されますので、ドクトラル・コンソーシアムご参加の意思確認をいたします。ドクトラル・コンソーシアム参加者の当該年次大会の参加費は免除します。

ドクトラル・コンソーシアムは、いわゆる Paper Development Session です。ドクトラル・コンソーシアム参加者は、全員が『組織科学』仕様の(投稿規定に則った)論文を持ち寄り、オーガナイザーの指導の下、互いに切磋琢磨することを求められます。ドクトラル・コンソーシアム提出論文は、「組織学会ドクトラル・コンソーシアム査読付報告論文」と明記できるようになりますが、それに満足することなく、ドクトラル・コンソーシアム終了後できるだけ速やかに修正し、『組織科学』等に投稿されることを強く希望いたします。

そして、ドクトラル・コンソーシアム開催日の夜(年次大会前夜)は、ドクトラル・コンソーシアム参加者のご希望にできるだけ沿えるよう、数人のシニアの学会員をお呼びして、懇親会も開かれます。くつろいだ雰囲気の中で、先輩研究者とのカジュアルな対話を通して、良い研究とはどのようなものか、研究を行う上での手ごかりや悩み、研究者としてのあり方などを考える贅沢な時間をお楽しみください。

ドクトラル・コンソーシアムに関心を持たれた大学院生の会員は、まずは研究発表大会での大学院生セッションでの報告に奮ってご応募ください。それがドクトラル・コンソーシアム「インビテーション・レター」への最初の一步となります。

大会委員会

【4】2024 年度組織学会年次大会のご案内と開催校挨拶

2024 年度組織学会年次大会は、2023 年 10 月 28 日(土)・29 日(日)に、関西大学千里山キャンパス(大阪府吹田市)にて開催されることとなりました。

この年次大会のテーマは、「組織論的視点の浸透」です。

組織論の知見・視点から、さまざまな現象について我々は何をどこまで、どのように解明し議論することができるのか。改めて、様々な領域の知的活動において、組織論的視点がどのように活用されうるのか、皆で検討し対話する機会を提供したいと考えています。

今回、戦略、歴史、イノベーション、ヒューマンリソースマネジメント、アントレプレナーシップ、安全マネジメント……といった多様な領域に組織論を掛け合わせたレギュラー・セッションを午前中に配置しました。

午後は、基調講演と特別セッションを配置しています。1日目の土曜日は、近年さまざまな学問領域で取り上げられてきている「ウェルビーイング（幸福）」について、2日目の日曜日は進展著しい「データ・サイエンス」について、各々、組織論的視点を絡めて検討します。

これらに加えて、ランチョンセッションなどについても準備を進めているところです。

開催形態については、「対面開催」を念頭に企画してきていますので、皆さまとフェイスツーフェイスの形で交流することを大変楽しみにしております。

関西大学千里山キャンパスは、梅田駅から阪急電鉄千里線で約20分の「関大前」駅から徒歩5分程度です。宿泊ホテルにつきましては、開催校にて確保する予定はございません。梅田・大阪駅近辺でのご宿泊を各自でご検討くださいますと幸いです。

皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

2024年度組織学会年次大会 実行委員長 原 拓志
実行委員会一同

【 2022 年度(第 18 期)決算報告 】

2022 年 10 月 1 日開催の組織学会会員総会において、2022 年度（第 18 期）の決算報告が承認されました。

第18期 特定非営利活動に係る事業会計

活 動 計 算 書

自 令和 3 年 9 月 1 日 ～ 至 令和 4 年 8 月 31 日

特定非営利活動法人 組織学会

(単位：円)

科 目	金 額		
I 経常収益			
1 受取会費			
個人会員 受取会費	23,900,000		
団体会員 受取会費	780,000	24,680,000	
2 事業収益			
定例研究会参加費	122,000		
年次大会参加費	846,000		
研究発表大会参加費	984,000	1,952,000	
3 その他収益			
雑収入	2,000		
受取利息	54	2,054	
経常収益 計			26,634,054
II 経常費用			
1 事業費			
(1) 人件費			
給料手当	3,254,175		
法定福利費	567,505		
人件費計	3,821,680		
(2) その他経費			
大会委員会費	2,000,491		
組織科学編集委員会費	14,116,718		
学会賞委員会費	221,648		
企画・定例会委員会費	181,035		
支部研究費	70,369		
総務委員会費	1,646,305		
広報委員会費	184,140		
国際委員会費	59,500		
その他経費計	18,480,206		
事業費 計		22,301,886	
2 管理費			
(1) 人件費			
給料手当	3,254,174		
法定福利費	567,505		
人件費計	3,821,679		
(2) その他経費			
振込手数料	21,611		
什器備品費	116,600		
ソフトウェア利用費	133,584		
支払家賃費	1,784,809		
会計顧問料	209,000		
その他経費計	2,265,604		
管理費 計		6,087,283	
経常費用 計			28,389,169
当期経常増減額			△ 1,755,115
III 経常外収益			
経常外収益 計	456	456	456
IV 経常外費用			
経常外費用 計	0	0	0
当期正味財産増減額			△ 1,754,659
前期繰越正味財産額			74,466,109
次期繰越正味財産額			72,711,450

【 2023 年度(第 19 期) 予算 】

2022 年 10 月 1 日開催の組織学会会員総会において、2023 年度（第 19 期）の予算が承認されました。

— 第19期 予算書 —

自 2022年9月 1日
至 2023年8月31日

(単位: 円)

科 目	予算額	備考
I 収入の部		
1 会員会費収入		
個人会員分	24,000,000	
団体会員分	780,000	
2 定例研究会参加費	400,000	
3 研究発表大会・年次大会参加費	2,500,000	
4 雑収入	100,000	
当期収入合計(A)	27,780,000	
期首収支差額(前期繰り越し金)	41,162,896	
収入合計(B)	68,942,896	
II 支出の部		
1 事業費	25,060,000	
大会委員会費	4,145,000	
組織科学編集委員会費	14,450,000	
学会賞委員会費(高宮賞)	450,000	
企画・定例委員会費	650,000	
支部研究費	240,000	
総務委員会費	3,425,000	
広報委員会	850,000	
国際委員会	850,000	
2 管理費	12,580,000	
給与手当	8,400,000	
臨時給与	30,000	
法定福利費	1,600,000	
振込手数料	40,000	
什器備品費	250,000	
ソフトウェア利用費	200,000	
支払家賃	1,850,000	
会計事務所顧問料	210,000	
3 予備費	50,000	
当期支出合計(C)	37,690,000	
当期収支差額(A)-(C)	△ 9,910,000	
次期繰越収支差額(B)-(C)	31,252,896	

【 総 務 関 係 】

【1】年会費納入のお願い

既にご案内のとおり、2022年9月1日より2023年度（第19期）に入っております。つきましては、お早めに年会費のご納入をお願いいたします。

1. 口座振替(自動引落)の方

2022年9月27日にご指定の口座から振替いたしました。何らかの理由で振替できなかった場合には、事務局よりご連絡を差し上げております。

2. 請求書処理の方

今年度分の請求書は、2023年4月の発行・送付となります。

期間内に上記2つの支払方法へのお申し込みをいただいていない方には、従来どおりのゆうちょ銀行「払込取扱票」をお送りしておりますので、窓口にてお手続きください。

※一部会員には滞納や支払遅延がみられ、予算執行上の扱いや決算時の未払い処理等で運営上の問題が発生しております。会員の皆様には、くれぐれもお忘れなく会費をお支払いいただきますよう、よろしくをお願いいたします。

【2023年度 若手学会員を対象とする研究支援について】

組織学会では、組織研究を活性化するために、若手学会員の英文論文の執筆・発表や共同研究等を奨励・促進する研究支援を、下記の通り実施します。

＝ 記 ＝

A) 英文論文の校正支援(1件当たり5万円)

(1) 支援内容

- ① 組織科学英文年報や国際ジャーナルに英文論文を投稿する論文、国際コンファレンスや海外の学会で発表するフルペーパー(アブストラクトのみの場合は支援対象外)の英文校正費用を対象として、1件当たり5万円を研究奨励金として組織学会より補助します。

(2) 応募条件

- ① 応募締切時において40歳未満の正会員が第一著者であることが必要です。
- ② 再応募も可能ですが、一度支援を受けた場合には、最低2年間は再応募できないものとします。

(3) 応募手続

- ① 応募者の連絡先や投稿先などを、規定のフォーマット(組織学会ホームページに掲載)により申請してください。
- ② すでに投稿済みの場合には、受理レター(プリントアウト・コピー等でも可)を添付してください。
- ③ 締切は年3回(12月・3月・6月)設けます。2023年度は、2022年12月2日(金)、2023年3月3日(金)、6月2日(金)を期日とします。
- ④ 組織学会事務局宛に、必要書類を添付ファイルとして電子メールで送付してください。受付は締切日の17時までとします。

(4) 支援決定後の手続等

- ① 支援決定後に投稿する場合は、研究奨励費受領から1年以内に投稿することが望めます。投稿後は、受理レター(プリントアウト・コピー等でも可)を組織学会に提出してください。
- ② 学術ジャーナル・学会予稿集などに採択され、掲載が決定した場合には、掲載論文に組織学会より補助を受けている旨を明記し、抜き刷り(電子ファイルもしくはハードコピー3部)を組織学会事務局に提出してください。

B) 若手会員を中心とする共同研究(1件当たり10万円)

(1) 支援内容

- ① 代表者およびメンバーの半数以上が、応募締切時点で40歳未満の正会員である共同研究を対象として、1件当たり10万円を研究奨励金として組織学会より補助します。

(2) 応募条件

- ① 共同研究のメンバー全員が正会員で、代表者およびメンバーの半数以上が応募締切時点で40歳未満であることが必要です。
- ② メンバーの所属先は、複数の機関であることが望めます。
- ③ 継続申請も可能ですが、原則として最長2年までとします。

(3) 応募手続

- ④ 参加メンバー氏名、研究テーマおよび内容等を、規定のフォーマット(組織学会ホームページに掲載)により申請してください。
- ⑤ 締切は年1回(3月)設けます。2023年度は、2023年3月17日(金)を期日とします。
- ⑥ 組織学会事務局宛に、必要書類を添付ファイルとして電子メールで送付してください。

(4) 支援決定後の手続等

- ⑦ 研究グループは自らの責任において活動し、研究奨励費受領から1年以内に研究成果報告書を、組織学会事務局宛に提出してください。研究成果報告書は、組織学会ホームページで公開します。
- ⑧ 研究成果については、研究発表大会・年次大会などで発表することが望まれます。他学会等で研究成果を発表する際には、組織学会からの補助を受けている旨を明示してください。論文などとして学術誌等に掲載が決定した場合には、組織学会より補助を受けている旨を明記し、抜き刷り(電子ファイルもしくはハードコピー3部)を組織学会事務局に提出してください。

【事務局より】

【1】会員情報の登録変更について

会員データ登録内容(所属、住所、電話、FAX、メールアドレス等)に変更が生じた場合は、必ず直接事務局へ、お早めにご連絡くださいますようお願いいたします。

「会員情報変更届」ご提出のお願い

組織学会ホームページの「会員情報変更」より、「会員情報変更届」のフォーマットをダウンロードいただき、変更事項を入力の上、メール添付にて、組織学会事務局までお送りください。

会員情報変更ページ：<https://www.aaos.or.jp/mypage>

件名：組織学会会員情報変更

お送り先：「soshiki【at】rio.odn.ne.jp」※【@を入れてください】

※事務局に直接情報が届きませんと会員情報の変更はできませんので、ご注意ください。

組織学会通信 第92号

2022年12月20日

発行 特定非営利活動法人 組織学会
事務局

〒100-0005 東京都千代田区丸の内2-5-2
三菱ビル 地下1F 171 区外

TEL : 03-5220-2896

FAX : 03-5220-2968

URL : <https://www.aaos.or.jp>